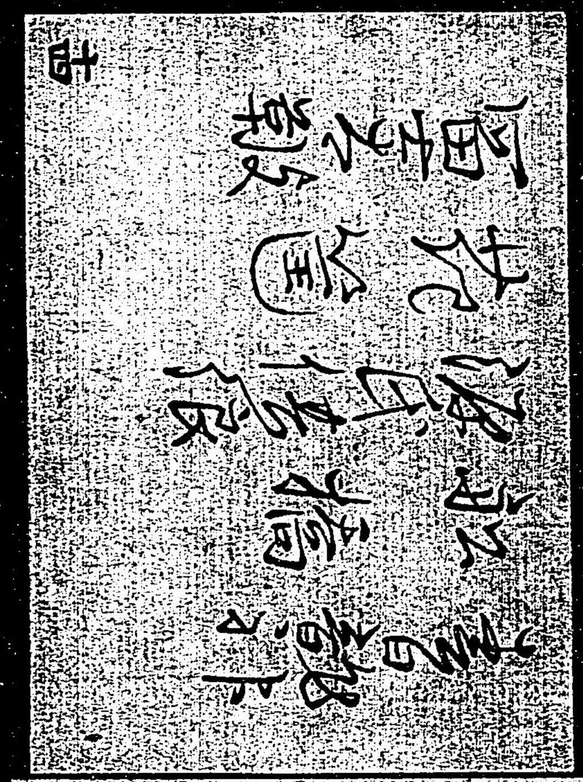
特42
446



第二

春日龍神

月はいづくもいづくにてもとゞ日の入

国を寿命　平内　見ぬ柵尾の明惠法師

入唐渡天の志有よりぼ

思ひ入る南都より高倉宮に

去ぬる所をとゝ月よ

あらひの里の松、緑もいとも長閑なる
都のしるしを沿よみくぐるも南の新路
やがて名に扱ひくこゝに公立山ぶ目のさとよ
晴たる空よ向へ
まつよきやしく
和光のそとぶらたるり　まつ山
動さる形を現して　只今よ言る神道
を頼しぼ年安まりちまをみきて

人間長久の色をそなへ、城よ立れも久
方の天の見や根の命とゝ世とゝとやう月よ
うつ影を島居の一柱　上社　社の搭を
さうおとゝろの神の代よりれ
まうきてゞあるる水屋のこゝ山の産
よまつる神心ぶを立の森の松風も
投をあらさめ乳ぶ　平河　めやよ

見成宮つよけき事なれ　テハ　やど見
い梅尾乃明恵上人のもとにやどりそやどりの
はしまをさ社神無月敷思ふらん
平
さんのゆとしまをさ中食の成よあらひ
我入唐渡天の志ありしよりぱ眼をれ為よ
ふしまりてい見たいたてしたびるよ
上人乃ちかの年始より四季おりこのはしま
ぢの時常乃女逢遠をるよ物りね
珍子神無月ざ秋上人をいはる郎
とゝ付笠直れ解脱上人をいはゆと頼
ふ居女の服両れ手のとくみく書夫
各しまり擁護懇ありると社形ていよ
日大ちと去入唐渡天し給ひんとびいく
神無月叶ひさぬ思ひとゆりぢ人

「今ハ昔唐土ニ入唐渡天ノ志
シ侍リシ僧ありけり。為ニ仏法ヲ求メ
ント思ヒ立テ、遥ニ行ケ共、
其ノ国ニ至リテ、見ル所ノ益モ有ラ
ザリシ時、ありけるにそ見ル所の益も有へ
きなれども、此山に社ノ明神ハ鷲山ノ
ほとりにおはします。大和国ノ境ノ
此手ノ谷ニ入ル。人問ヒケレ
ハ、上ノ方ニ三笠ノ森ノ草木
ノ繁リ合タル所ニ、春日山野
ノ中ニ、一ツノ鹿ノ臥タリケルヲ、
人ノ来ルヲ見テ、皆悪ミテ、
ウシロ向ヒ
ヤ
ノ様ニ、角ヲ立テ、
ウ
ノ方ヲ向テ、

「ここに止りて社を造りあらためまゐらせ
平河
ん」と宣ひて、まづ妻はかうとへ
ていはく「仏法流布せ
ん為に入唐渡天せんとしかども、天
魔ども障りをなすなり。古跡を尋ねあそばし
台山を経巡りて数日まゐらせ
ば、文殊堂山のもとあらば、堂舎を築造せ
すべし」と宣ひ、「昔の聖賢、宣旨を
度きしてだに明神と示現し、此山より宮
殿を建立し給へ」と宣ひ、即ち勅宣の太山
出し給ひ、我も生れ釈迦手
石佛なりやまき紀月のぞを聖
とその所に詠ぜ給ひ、あらたなり。
ひあるべき慈悲万行の神徳の
照を故あれやぶ機の所生益ある

ぶひ給ふ。御殿、御寝を脱離
離し、三夜を経て、四諦の法を説
給ふ。鹿野苑も寂滅の日なり。
記仏、鹿の園なりしや。春日社
の有様の、山、三笠より陰さしぬ。
うちなびき、顕きく拝むもよき日
なり。宮路も、まゐるや、曇りなさ面
白

大寺月もみく、宮、上、増る七大寺、虎
法の花も、宝樹の都とぞ、春日野
去社のとまりぞ、花、雲、雲、雲、
やがて、即見を、神詣と思ひ、めぐ、此
度の入度をいとひ、人、伝は、
いう、人、ぞ、名、ぞ、鈴、ぞ！
入唐度、大をとまり給ぐ、三笠山

五大菩薩摩那の誕生仏那の
成道（せん）雞鳥峯の説法　雙林の入滅迄
とゝ〻を〻をもたるゝ指てよ指
へゝ綿宮手の沙弥乃告我に問も者
行ゝとて、ゆきゝ　ゆきゝ
弟上子　非詭まさよあゝ　ゆるゝ少く苦しうよ
　　　

[illegible]
法を聽ゆるまた[illegible]昌叉此法陸那王
まこの持法堅那羅王 [illegible]樂乾闥婆王
樂音乾闥婆王 樂和阿修羅王 [illegible]候
[illegible]の眷屬[illegible]
[illegible]
[illegible]
の神[illegible]自妙なる[illegible]和田の原乃松[illegible]
白玉[illegible]

[illegible]
[illegible]ぼの[illegible]
[illegible]出れば大龍王色
[illegible]やつ乃冠をかぶる[illegible]前[illegible]月
[illegible]三笠の雲よりほと燈乃野守も
[illegible]
[illegible]
法の林に入[illegible]
[illegible]
[illegible]や明惠上人依入唐[illegible]

渡天いめ夢まし　法仏師は
寿めまりや　寿めはよくも此うへ
あらのそよ吾まく　龍ゆ南方よ
高行龍井の猛沢の池乃土浪を
たくきて其大地と
あつく天よりうり地よ蟠て池
水をうへして失よきり

永橋

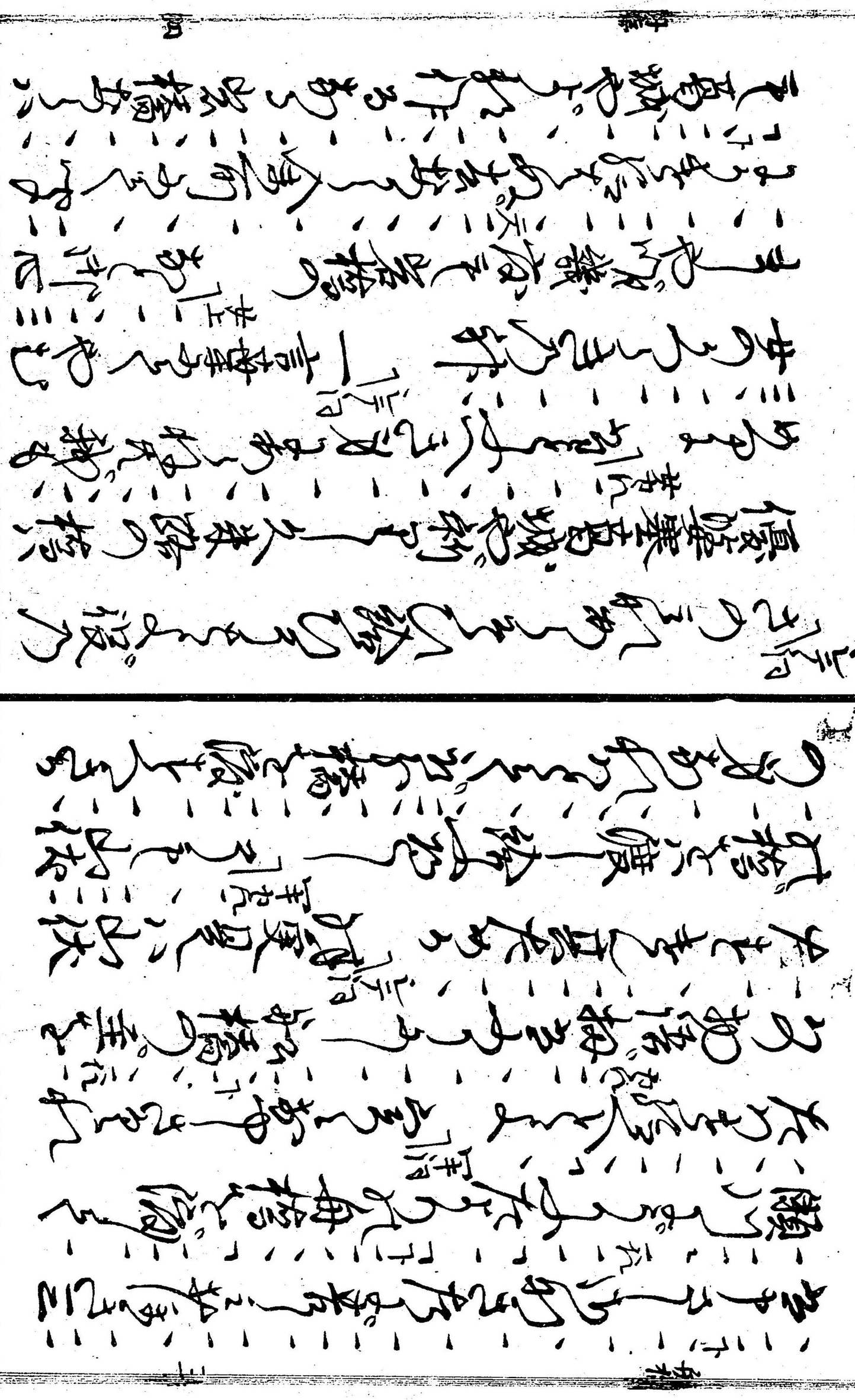
山まゆ行末やく雲路の去へ
水流れ見へ三熊野より出まれ
富僧みちの秋末松嶋ひいを
三ひ行よ此吾風立松嶋ひいの
三と高ウ鶴ひいの面ひの
川ウ似鶴女兄樹りまつ年よ一夜

ハあるとき夢の醒井の宿をひさぎ侍る
あるものとまりの月雲晴れやうの尾
張者と云れと云ぶかく冴わたる
見ハたやと聖國住鶯声有と見て
いざ行かくやとをかしやとなん
侍りける道そとはる毎橋いなのせい
くる頼られ　住るサル敷花として行事

元ぶら橋と夢ふる橋よ杜鵑そくく
ふるさはま堀江れ川のうきつよりうと
定めあるあ波の宇世と時れ六の道
皆まりのるる空ウ立ちもあとい
みとの師ちくくとまひやれウヤ前の
世の酬ひのまりはれきくウ心よ
りけハ世まの生死の海を渡うさ松

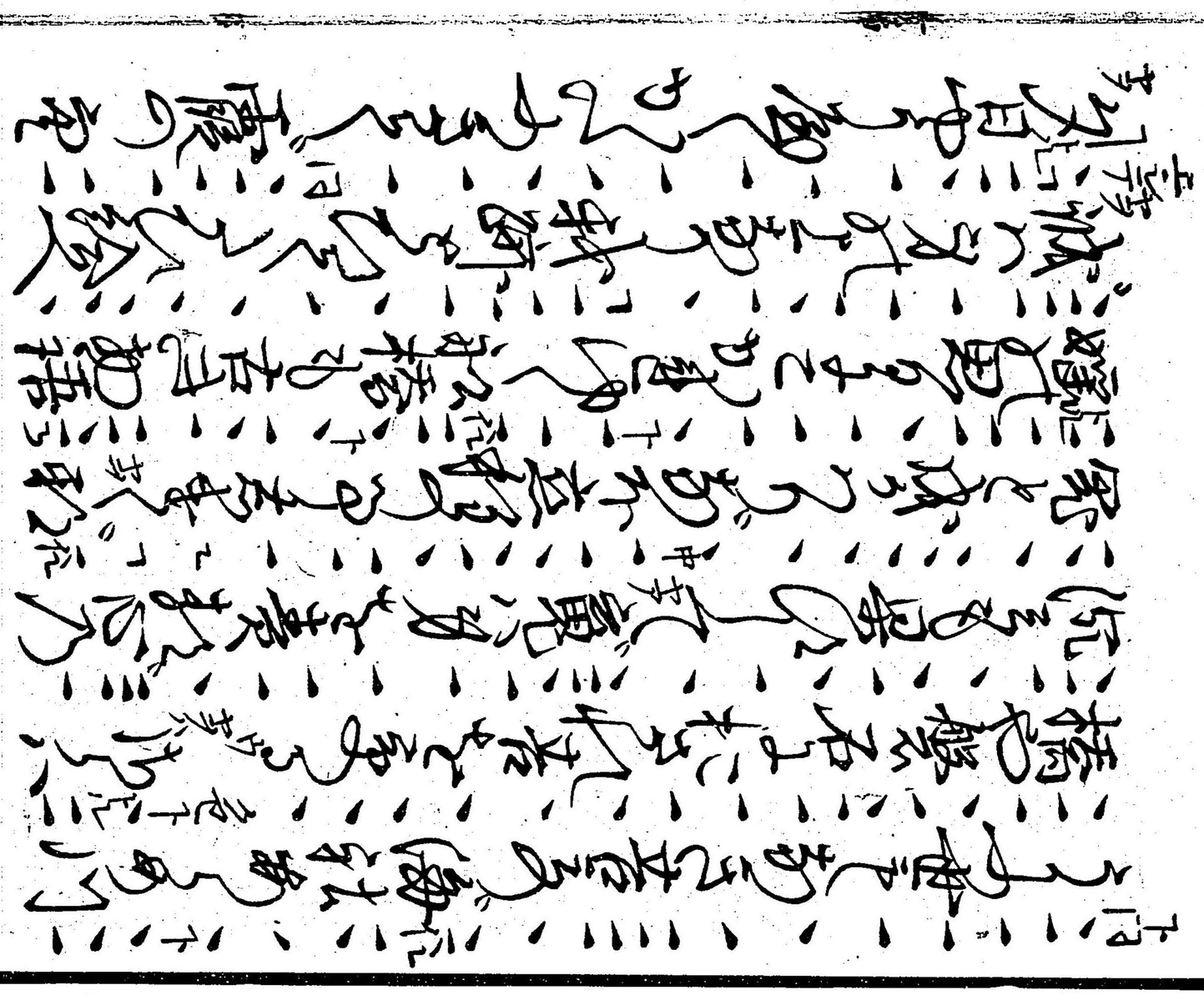
ことはつくらるやうに、江の流れに有おうら
科学十八首多くしきの橋を渡さる
やく　めずらしき家の俗橋の勧よ入く
市角うる人　見やすき俗侍の子を
て橋奥立の志ぞ　もやさう
拙人　見い行先　ぬ　かるしも
家よあるひとく　志乃有まさて

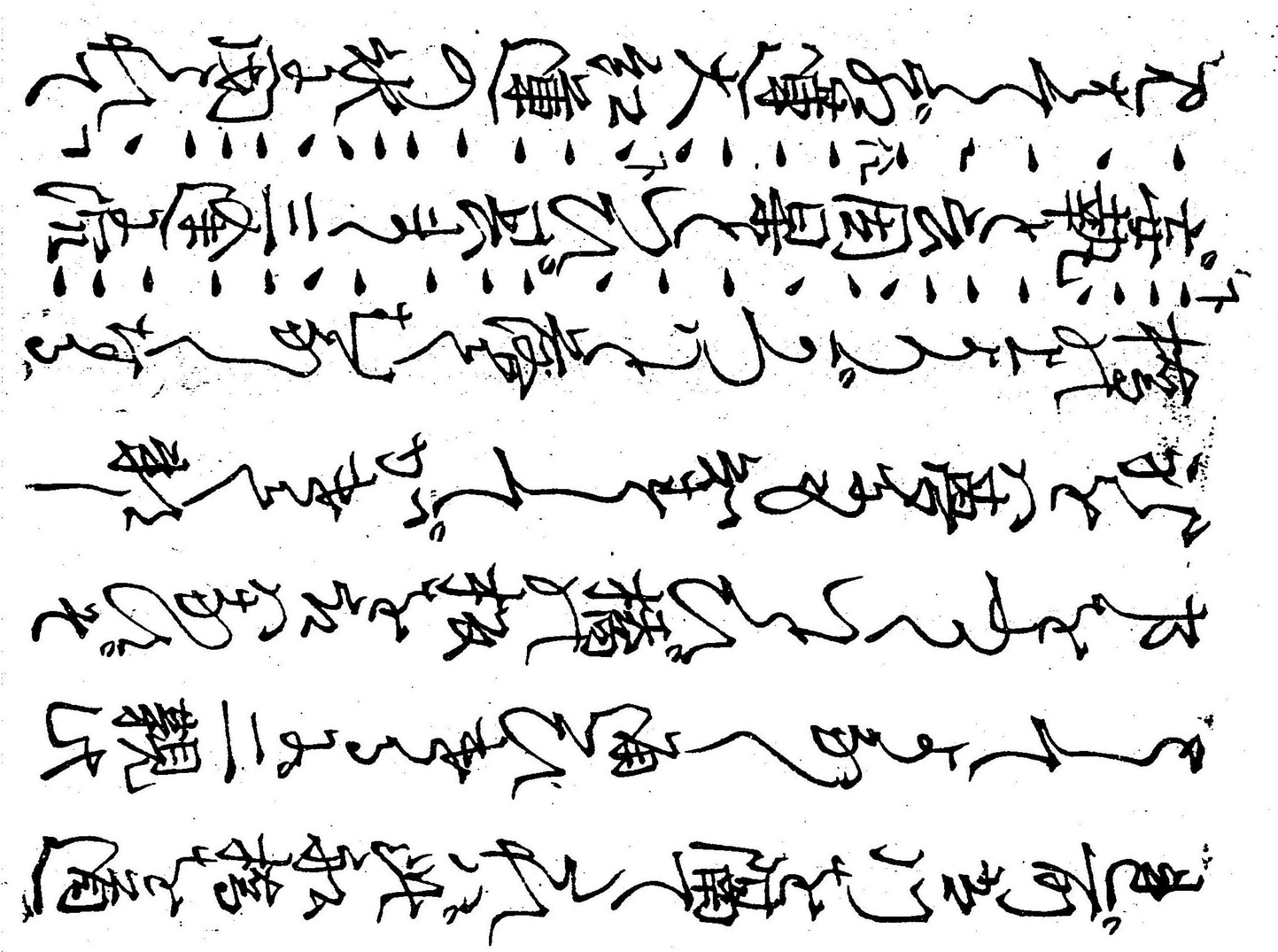
もらひを勧うる人　計角作へ
勧めしまりかく　俗洪橋立の仕方
より渡され　橋ふく　万葉集
対立よ東路の作　舟橋とうの
と詠る立ちをいたきめらひや
世　作橋よりきて　やのいかも
清岡山　てかき　沉立　洪行のさ入



濃しらみもつかうへ　見ハなるさ
まの日入長国はき水の舟橋をさして柱
をもつれまもやづつらつよ杉屋を作る
絵へ山伏　上者法
乃濃しれタ言葉よ神ちらかしひらくれ南ス
めるかい藻魚の　言代　うもまを也河もの花
吹海を舟橋ばはよゆきくれ蔵作る

山伏蒙ら四て行ば　行方　濃しで南てハ
いたくへ行き給ふべき　伝ふ　方　集
はてよ東路のさあ永橋とうの形
ど鳥ハかりと　一流よまれるば行と
中たる渭みちくひそ　さんたそ永よ
はちく物語の　進ちくゆをドんへ
首洗有よ位きる者ぶひ妻よあこか





をうらうらとして雲とあり雨となる中
古代道をつくり橋をかけて中絶
ぬ宮ハ（ヤスハ）いまハ東路の佐野の舟橋
鳥ハあり鐘こそ響を久堅の空も
あきよ秋よまさりつゝ　中上元　ふりゆく跡
をあらためくウ三寶かゆの行ひ
よ五道の罪も消ぬべき法の力ゝ有

一ト二三四五
絶さのくいうよ行ぎ方紙や徒よ
三途よ流ゝ多ゝれ法の力かゝ母
橋の浮ゝ方と成有難さよ　ほ上三　めゆよ
行者我ゝおほし此妄執の故よりう
ぶうゝ急ぐる橋柱ゝ多ゝ苦患を
ハ苦ゝ多ゝ　ハ苦ゝ多ゝ
ゝ

やうまあ[illegible]挂をつかと藤右
の吾患　[illegible]
見我が者教喜撰の功力をまらし
ちらく太落乃底の[illegible]を[illegible]
心者所が[illegible]や痛りや未
邪婦の業ちと執心をより捨く
[illegible]音と懺悔を行へ懺悔

よ罪つを消く[illegible]月を出つ
五障の霞の晴り[illegible]時
胡蝶夢乃[illegible]海を
[illegible]や[illegible]野の[illegible]と
[illegible]も妹背[illegible]乃[illegible]捨乃と[illegible]
[illegible]自波乃[illegible]と
[illegible]浦乃[illegible]

妻ぞ宵くらよ角ひ別くる船橋のざ渡る
夜の月を待つそよ更ふまりく
上地
人もねよう〜うう寒さ行風も
しとう逢の向ひ岸よみく考る
人歌へそれ行ぶられ〜やだうを風
青
主はよそ孔そ〜〜中のく橋
と隔てく立ち波のどもの橋ぶ

り孔のぶ有ひの風を吹くまよ
離をる板ぶを踏そうぶかりと音く
深きち
東路のぶ舟橋ぶ
しぶやしりくまぶ逢ぬうも
執ぶ人家をつて〜ぶよ三逢ぶ川
捨ぶ橋柱よ立ちて要紙の乱色
よ替りぶほとおく生家やそう妄執邪

嬰の悪鬼とあらく我と身を責苦
患よ去門堂を行者の法味切力よろ
真如無忘の橋の去れ無忘の底
捨乃うへ去方とうぶ成よまきらく

源氏物語

第二十二　源氏供養

夜も同し苦行道ゝ石山寺に
参り給ふ　月日
年ふる世　是八安居院の法師より
我不思議観世音を信し常に歩を
もこひぎ　もしまうやと思ふ
時を名も都を立出て
よつるゝ夕波の白川なとを行ハ

羽の離れとようよみて、園の花のもとに、
霞だにまだ深くもあらぬ月の影もあはれ
に、鳥の音もまだ面白き気色なくて、
やうやう浪や寄せ来る磯のほとりに、
もの浦の浪たつこそ珍しきわざなれ、
あれ、なほ、安居院の法師とは、
とへ、きゆかしけれ

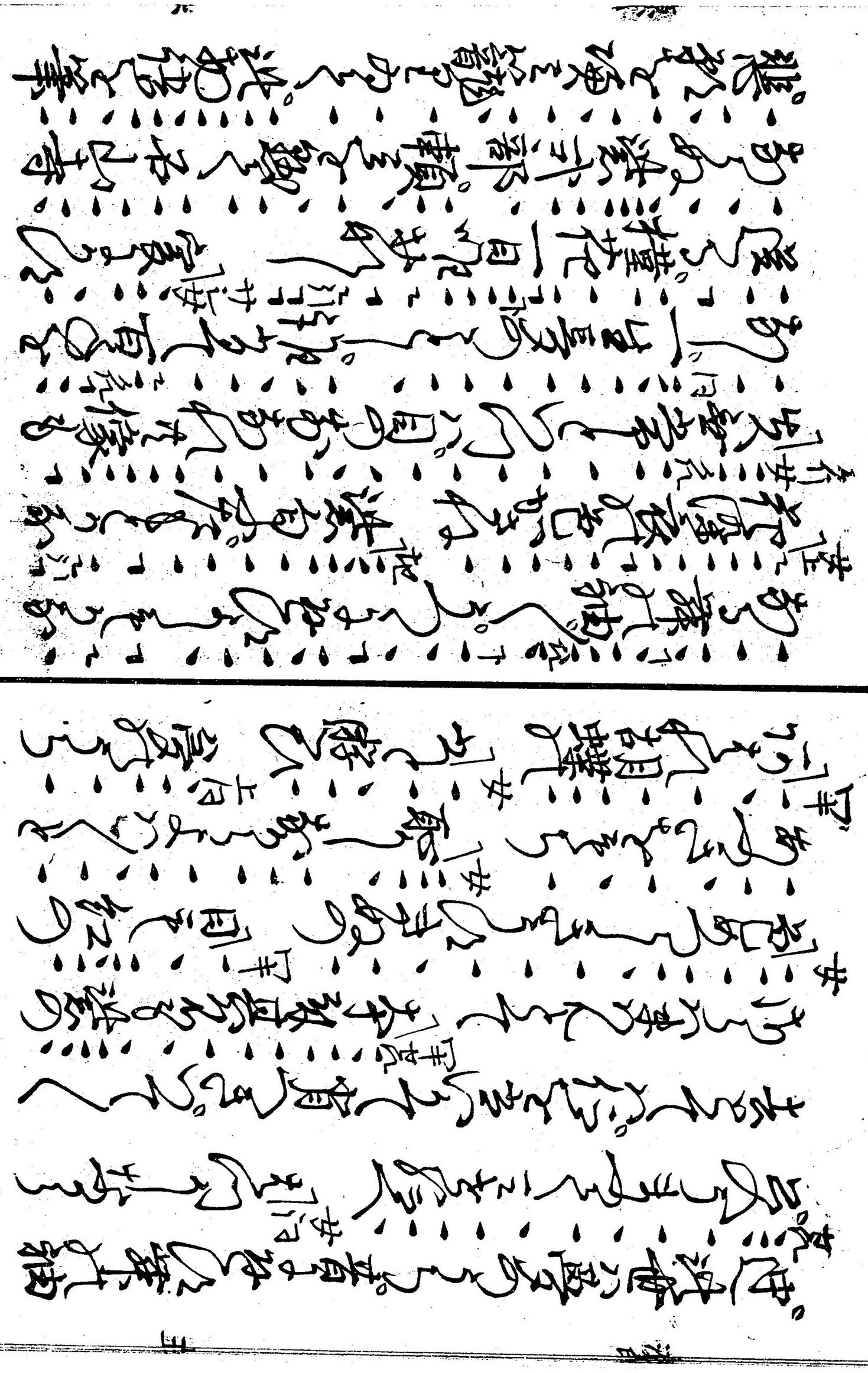
世上に我名は
ここうの源氏六十帖と書きつけおく
沿革の筆者とされども形見とは成
なきまぬ源氏より後の作者をきう
し科まうけあるべきもの
物語へ、いろ〳〵の作者を
宣づる跡として、たゞ給へど此ものと

[illegible]
[illegible]
[illegible]

いつもと絵うつ[illegible]おとこ更かうの鐘の
[illegible]元[illegible]
色心もとめる[illegible]
[illegible]
[illegible]

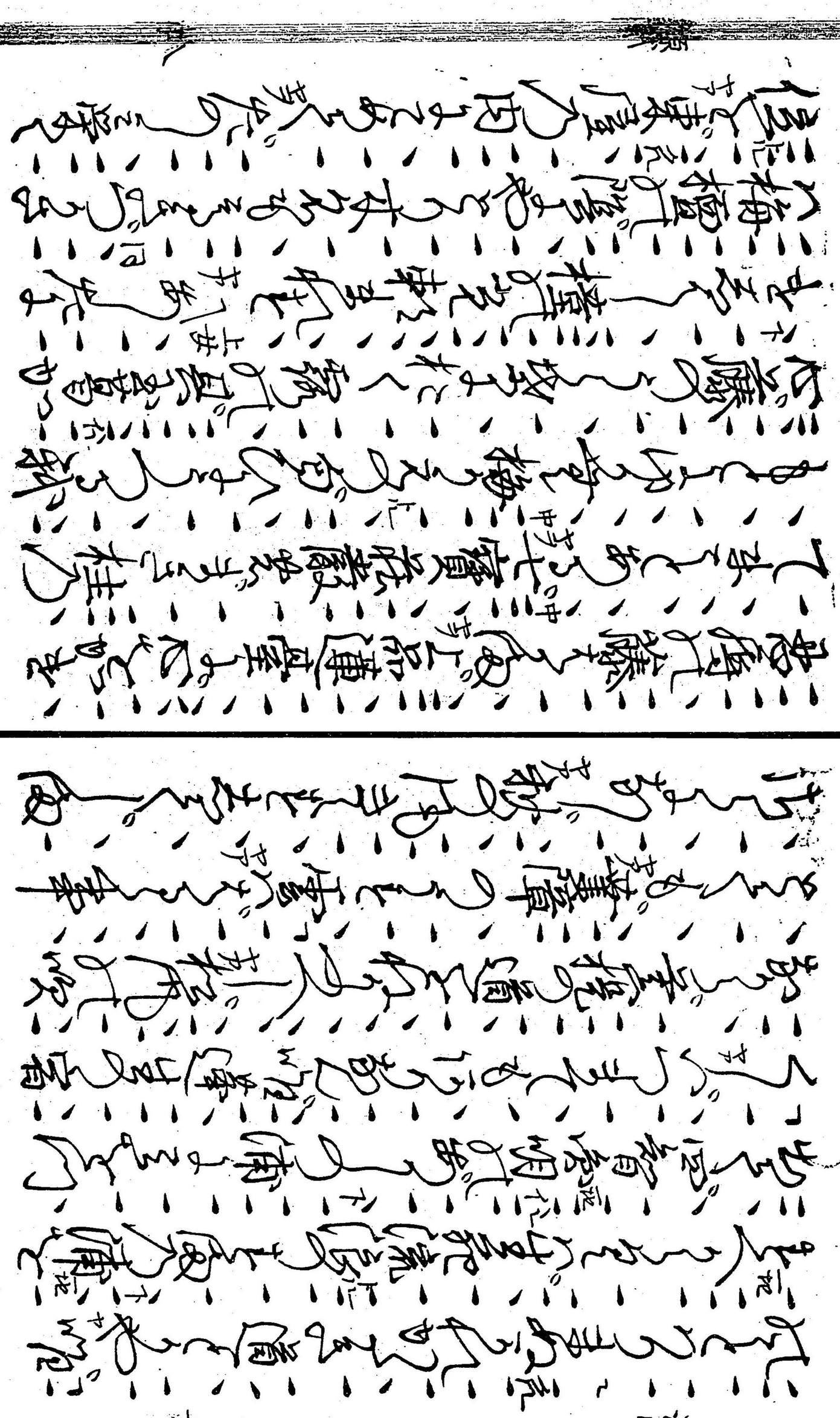
女　歌ばかりよみし法師の夢の現うつゝ来る
　うつろひやすき花色のべにさかれし宿の
　きゝうれし法の法みの結ぶの秋
　ぞとの美増まゝ通ふ人あるゝと
　きゝめされたまや　半上　法花色よ出すと
　あるまゝの宮の束ふ心えあ法式
　　女上
　歌ゝてまゝ方人ゝ　男つゝ女ゝ我改

女　法花経もかゝるは
　　上句ニ点
　たゝひよ心を　社おきもきゝ　ねもきて
　あるひ法花経の月を心きよ石山寺
　　下ニ点　　下ニ点
　鐘の声澄ゝもさそふ風の前消ゝ
　　下ニ点　　下ニ点
　てまゝ燈火の砂ともんく
　　女
　　下
　　男
　　下
　　男
　　下
　　男



よまひ（下）はかれたる絲よ佛前を去らず
科（しな）よりとゞ玄孫（やしは）の手を晴羅（はるら）　今逢
羅さ緣（えん）よむつ（六）ら四十九日の勤を去り
一つの巻（まき）ものを寫し供養の眼を去る
南無や元淨（げんじょう）の靈魂（たましい）等三界覺
悟（さとり）の桐童（どうじ）の燈（ともしび）やうよ法性の
宮（みや）よ至りぞくきすれよるのつとの業

「絲よ花樹の花ちりぬ空蟬（うつせみ）のしがら
此世をいとひて、いかゞ身（み）の命（いのち）と
觀（かん）じ給ふ雲の上人（うへびと）宋摘花の臺
よ高き枝をみちれ加賀の秋の落葉もよ
しやうぐ（ヤウ）の面（おもて）佛意（ぶつい）よあひ（ヤウ）なる
排（はい）堂（どう）のけりて往生を願（ねがは）へ
花（はな）ちる宴（うたげ）よとゝも愛（あい）の離苦



を浮舟よたとへしとりや見も蜻蛉
の羽なるべし長のうさ橋を打渡り
上がの茶屋迄をはりて南方や西方弥
陀仏茶狂言綺語とうり捨て法式ア
かなのようとだをとをつへとをろをもよ
ヤ鶯うぐいすなりして四面も既終りぬ
吉兵ウ面白やまひ人乃ぐ物い面ひとなく

鳥乃ぐ幼をもうへ人を扶ト　女上　完源
氏の市ありとを吊りて法れもちかりまて
我を生まれん蓮乃花のえんをたの
上花
をやうりやあ　たを扶乃ひひり
世ヤ夕をよへ影をあり　あるうまれ露いお
つ面いかきをつきうあるあるぬばりめお
ヤトキリ
ひうさ世やようくあと業をうあく

紫式部と申す彼石山の観世音かよ
世にあらせたまひて物語
書も思へば夢のよとぐよりきん
此方便きよう経きちひかれ思へ
夢の浮橋と夢のあひかうとよ
なりぬ

男行

昔の都前国あちこちの所
此所にあちこちの皇子よ仕へ申者
あらく伝拙も都より使ひて武烈
天皇の御代にたちまち皇子よ
御内つりあるに伝下里
此伝ゆきさやく御上落ぬ去

同洲狂法寵愛ゆゑ百つゝられて
照日のまへとゆき方洲狂法照ゝく
御ぢとよ方へ。彼御方へ俄の法
上席よつぎ。はゝ玉章と明角よ御
手よ別し法花笹をまゐらせられ
と。墓よ持てまゐれとの御事よ
て法狂よ。ゝ照日の法屋へと急ぐ

蕊うれや墓へ出ゝよ見ゝく
しへしいよゆゝ。三世間行ゝそ
男 我君の御ゝり御使ゝり御位よ
即を殺びきさとく法ゝゝ作
ゝ墓へ成法ゝと御祀笹とを慥よ
まゐきよとれ法ゝれゝてゝ
法発へ 女 母ハ我君御位よつを

殆び数への市をひらくもれ
めそたるそくへとよとおもふ洛年
こたれは名殆の世よりへ長らへき
月はなほ殆のやはらをを思ひ
あらしかな殆やはらをを思ひ
長れもして市玉章を殆重を
殆ものかはよ急きのたまはら
をひも上皇 我應神天皇の孫苗を
継ぎ給ふ。帝位をよみ給ふ。
はらきとも天照大神の孫なれ
毎日よ伊勢をを祈したてまつり
ぞ非感乃至りあや君臣のえひ
よ出されていはかれゆく雲のよめ
くりあへき日景をおさの軒をよ
殆とおり頼めたる独ゆき訓し月

歌のたゝ一ツ弁はへてありたと
書直ふるよりくきの流よ孫ゝそ
悲き　君をもとめたよ育し
山里よりくゝ孫として羽乃
つきあさもときまゝ松の尾を
いつかはたれ乃跡とてすゝき
花笹玉章をいきて里よりゝ

きりゝ　君の恵もたゝてゝ
くゝ紅葉の行幸やめん　かゝを
あゝも洗ふ嶽神天皇五代乃法来
ぞあとへの皇子とやしかの国乃即
位をさまりて継躰天皇とや也
はきは治まる市代乃は歌日れ大れ
名もあひよあ　大和国やまほの歌

今宮造　平　あらたなり　上六　萬代の
めくみも久しとゝん世よりつゝく　橋も
さらに秋の空露もたゝれも時めきて
宮方よ色こゝろ　元　松ももと珍れ
みちりゆてどさの　元　木の枝よめりあり行
幸の車をやめんく　元　ヒテ　陸奥　いつよあれ所
接人都への道をゝへ行あれ

とやおろしもゝ忘れあきの社と
おと情なくをゝ　上ロ女　引
海人をゝとゝ　上ロ女　都への道をゝ社
ゝへあまき出給へ鳳凰の濃りに
行ゝ　ミテ　向　ゝるとやゝ人う思ゝし
ゝり秋よいつも　上ロ　鳴ゝねの南へゝる天
津宮　宮とあゝ　まゝ　都を

やらんもうかぶ　あれ　ニテハ　おりをきうへの
たなりのあと　ワレ上　我もたのまれ原全
ゝうつきて　ニテ　ニテ　野
ゝのあれ　ニテ　ニテ　野
ゝのあれ　ニテ　ニテ　野
ゝのあれ

君のたり宴〳〵
濃き色の黒髪
乃ぬきもらす別路乃まくらの
うつれきて。蛍乃ゝ外堤乃ねくおれ
通ひ〳〵秋草に紅葉され露
ちらく。ほの宮よりきり〳〵
時しも共に長月やまき附雨乃いろ
うすさ紅葉乃行幸の道に過よ

非歌といまし〳〵めて面とよ行幸に沛先
を清めきり ばるあきたよりやてよ
あきぬひ御人乃ぬとひとひひ狂人とひひ
ばうう心いあうのもてばをみまく
露霜乃沛行幸のちきすえきり
ゝきやお具さ面人よかたりたま
ずとみて見苦しやとて宮人

ゝ、ゝ、ゝ、

ほろ酔よ　継鮒の君とうや
けまハかほとゝ　ゆて　たさ君の　御
花かつみを　忍まもおて　うち
落し給へ　人くゝ　秋よりも　猶
わらひよ　ねうろ　やく　世を
世よ　月へ　地へ　落て
ぬれもちもあぬ　花ろつを　忍ぶきれ

やあらうはなよ　花よ　花ろ　天の
とうめもたらまち　詩ろ　ろ　ひ
て　かとくある　乳　もの　あ
ぬ　ひとはけ　ぬ　お　へ　よ　ま
さを給へ　かは　ほ　へ　ろ
うつあさ　花　邑　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
此君つまる　其比　皇子　れ　ぬ　ぬ

おさとの法師勒、花をまゐらせおし
南無屋天照皇大神宮天長地久と
ぞとなへけるひつぱ手をあはせ分
給ひけれ面影ようひてぞとれ
形忍まてもたれやうひくや
上ニテ
陸奥のあさかの花うつろひし
人と共にの袖もちもり誰故う

秋きぬ君はたゞ寄よ来てうよ隔
あう月の却ハクのうきして独みもうつ
けりきぬ手ふもとれ徒よ水
乃月も望毎ぞ猿ひとうて呼ひ
ふて啼居うくめゆよ狂女
宣旨ふく有うう法車ちうまゐうく
いろも面白し和うく舞遊ひんへ数

洗うなきとの声もまてあうこゝぞ
いとゝ行てゆ作へ（ニテ行）うれやゆ梅はなひ
あきのは影を踏分へきいけや（カヘ）
はたんもろ声よ　行幸よ行ふ中（ニセイニ）
ゝ　（地ニ云ヒ）
ゝ　ひちきをうこゝぞたをとあまき
（サレ）
（主カ）
漢主へ（ヨリ）ゆ（ヒ）ん（ヒ）ぬ（ヒ）ぬ（ヒ）きこと歌きを給ひ

おきまつゝとゝ弥さひく。おりけく
も使よ（ヒ）ぬ（ヒ）男の涙は袖の狭（ヒ）ぬ（ヒ）
（トレテ）
まゝ書き丈人へ紅色の花ひようひ
裏へて出ほゝ露の涙ゆ（ヒ）ぬ（ヒ）ぬ（ヒ）
鏡のかきとそちて。終よ帝よ（ヒ）て
給ひて去たまゝ（ウヤ）御門（ヒ）く
歌かき給ゝ（中ニ）ちと甘泉殿の
（ヤ）

如へ、よろつし抜き畫圖よ立うひて
明暮欲き給ひきりぱきたあうく
ぱ思へまけりきたぱ。おいひいかひ事
なきもとぱく欲き給へきもと申
太子のぱときれくまひぱ父帝よ
そうぱうやうまま人へ本へ乞
ぱ寄れ饗宴ぱくりひいくの仙女あり

一且人間よぱくとへやきとも絵よ
もとの仙宮よぱの泰山府君ア
まうちぱ寄人へ面影もたうく
寝まけくへしとて九死接し中よ
たくぱ祝書もたきかぱよき人
たぱまりぱもとぱ月ぱちよ
うれとぱ面影ぱうあきかよ

かまうへ狂いやまの男女ぞ
よもとふ白露のぞ手もたまりて
狂もなくいつこ消ぬまた漂
脚侭揚してい又寿へき方あ
上レテ さうあまりよ丈人乃もと
下 元 元 下 元 ヤアト ヤアト 元 元
あれ丹泉殿と立ちひぞ
下 下 ラ
家とちちひるきふ元まぞ古き
枕ちう弦とかぞ

宣旨ちく

あるう具花筐とまるをあを人
上テ 上
ありけるよ胸ちりぞ宇ある
花ちとちとちまるもに
早
帝ハ見と敷浜うて疑ひもあさ
田舎ちく市手よあまり市花筐
カン
打ちくとちあ重ひぞ章

乃恨をとわれば狂氣をとくめよ
本のことくぶつうんとの宣旨也
シテ上 ヲスウ 孤やはめくん直ある居代よ
ゆるちもどへたをもしかをを
つとく 伊 はるとともよ時よあ
シテ 花の笹のんとめて 立つき
人の手引しあと シテ かをとんかて

伊 光付よりうつまり
シテ 上 あるあるかやく計情ちを
きる
とちつ露のぬくみよもきあ花笹
ト ちかとまつまきあ君ん法ちろ
ト キア まり地
つあつかき キア はは もをてよ時
シテ
とちくウいい海を寄手あたく
まつんと倍ちんを車やまつ
人ん法

きをみち侍りとよをちかさを拂
ひぢくらみや紙を山ぶしぢうれ
ゆくやあほの都ぢうまゆくや
ふあやかをやてよづきをぬちきり
うぢかりかさ

冨士太鼓

昔ハ

昔ハ萩原院ノ仕人ナル侍下也
扨モ内裏ノ七日ノ管絃ノ出席ノ
ヨリ天王寺ノ有ル所ト申楽人
ハ是ハ有ルヒナサタイテハ
ヒトキレハ太鼓ノ役ヲ仕ル家ノ
ノ住吉ヨリ冨士ヤ楽人ハ也ハ

ぬ大敷ものとまりあるく山ぶし笛弦の役をしたしみとなして此由や名れ富士詣
同行まも面白きを世去おろ古き
手よ[下]ぶ[ヒ]のなる法同の嶽をゆる
といへも[ヒ]富士煙のうひやかうをも
ゆ時ぶ[ヒ]ろ[ヒ]なきよ[ヒ]ろ[ヒ]成を
おのれ法同へまさうするおもと

勅宣ゆ[ヒ]ふ[ヒ]ろ[ヒ]富て富士ゆ者
もあく[ヒ]ぶ[ヒ]須は法同此ふ[ヒ]ろ[ヒ]ぶ[ヒ]ろ[ヒ]
きよ[ヒ]ろ[ヒ]振舞ふ[ヒ]ろ[ヒ]ぶ[ヒ]て彼富士よ[ヒ]ろ[ヒ]
よ[ヒ]ぶ[ヒ]あく[ヒ]ろ[ヒ]富士ゆ[ヒ]ろ[ヒ]ぶ[ヒ]ろ[ヒ]ぶ[ヒ]ゆ不
便ろ[ヒ]ぶ[ヒ]ろ[ヒ]ぶ[ヒ]ろ[ヒ]ぶ[ヒ]

ちかく遠ざかる。富士川へと考へ
昔の津の国住吉の楽人ども中
人の妻や子ども。ねもの裏より七日
管絃のまゝ。ひよりの天王寺より
楽人ども。まち曲をきくべうもの
太鼓の役世よかれぬきれぬ望みア
ちん真ためよ。都へよりし夫のまれ

夢忘れから月の雨　そもそもの独り
涼しとあるかねたるよりもうら
初ものあまくよ思ふつゝ雲井
やうの古郷や住吉の松の
陸奥の詠ぬ月落かゝる山城も
そやゆつきハ笠をぬきぬ播よ
掛芋のもとより夢あらく

ぶつ〻と遠や雲山おたかやく美よ
きりく急い行よ都よつきて
洗而みて富士行るとと寄りやと夜。
いりよ業ハ日富士のの
者みくぶよりよ会きわてなりんへ
早く富士りりとやハ行くよあるそ
見みハ拝きハみう為行みて有

う取り書やよみく行
富士きうたまてよ行と富士ハ詩き
たりとやハ中ハ富ハ清ハ詩き
てハ山きハ社見る会き夢てう。
富てとうたりくよ清ハ詩き青お
一月元日、もれ高きみ。煙とハ水
ぬらぶぶうき歌くよ見りもおき弘よ

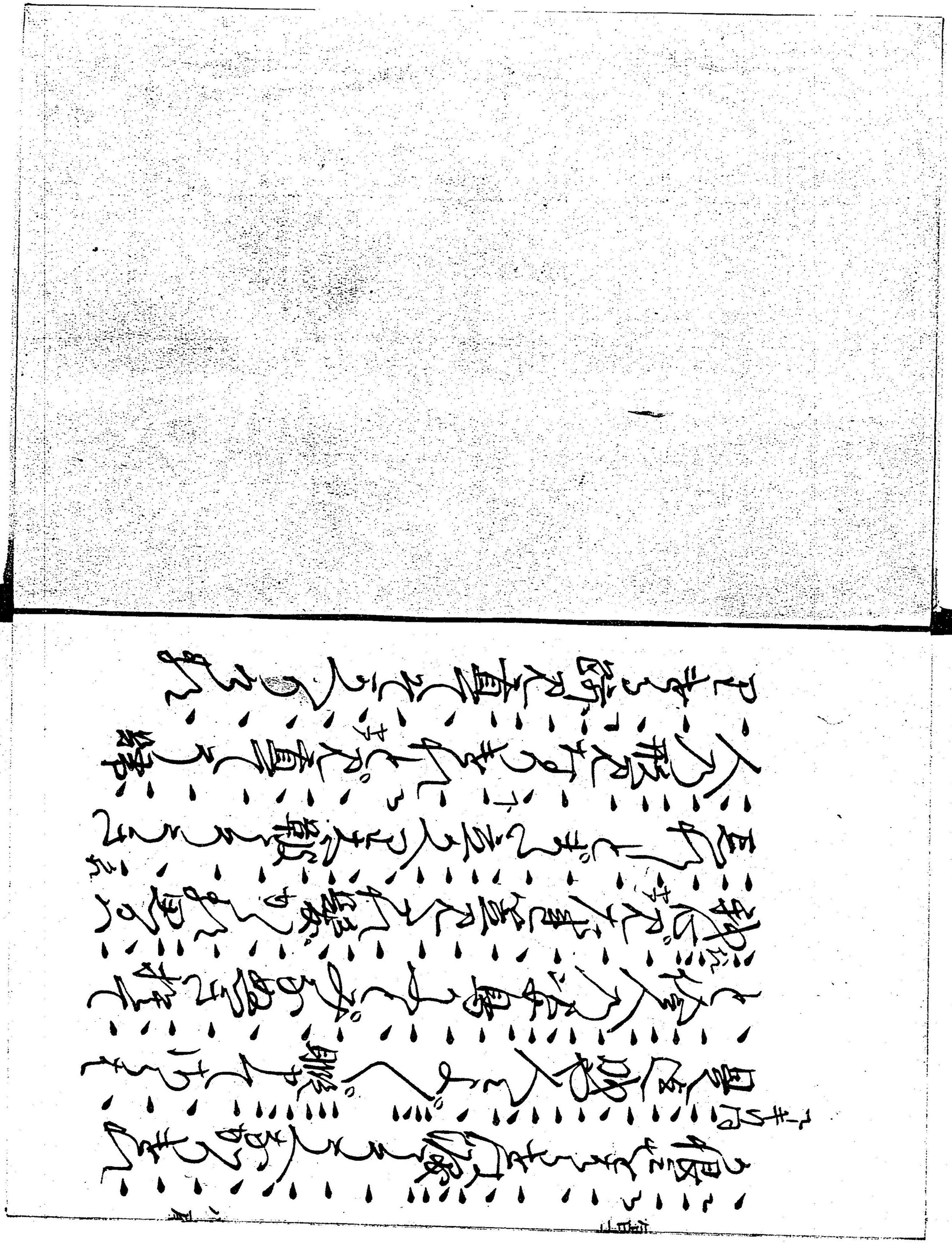
[illegible]
なきなやあんと（甲斐）へうん敬ふくもうひあさ
うすうてうう。乞狂ふ。か蒜の芸宋ん
よぐき人の敬きはへ形ん[illegible]ふ事
あ〜。見せとみく思と魅めんへ（世）い面
[illegible]
迄を行るもちらぬ新人の童と思舎ん
去と思ろてぐうりふ[illegible]と言ふ。鍬ふ

[illegible]き島甲月日も替ぬ特長の鈴ん
有ぐあ〜へ狂痛りや徒人出ぐひ〜時
ぐつ〜ゆ。やう。天ふ主寸ん楽人ハ石ふて
[illegible]
よりたりぐ出ふへ新宮おさぐ。して[illegible]れ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ナ志もぞ[ヒメカム]ぬ領まして出ぬ[ヒメカム]ひ、ト月、主面
歌ぞうよう[ヒメカム]と主乃主なるあの
見れば筐そよりおかさい[上弓月]姿てよりかくゆ[ウヤ]へ
きと思ひもおぼ[ウヤ]く有へきと思るおかぬ[ヤ]うて
うろ手を出ぬ[ヤ]ぞ[ヒメカム]ぬ[ヒメカム]ぬ[ヒメカム]ぬ

父をよろこばれるすもたいて故ざあらば親
の敵そう。討て恨をもとへし　女童
うためよ妻の申きぃぃちや孫ちうとろ
ともよ　男乃ぶ猪衣よ。ぶとあれや
鳥甲　恨うの申き討をさめ　つをと
若よ　うつまんとて地上ようするや対乃壱
立て。村の用よ冷しや　女童てやく

と責つを　あ地ら拍ろのぶく音やお
上言　重ウも思へ腰なたちやぴくぎ当る冷
よりうへて。ヤ心言戦もなろれぬぶう敵
ろ来ると。ヤ戸なのうろやをと
ヤと大戦ろたや　ト女持ろたち
と剣と宮あヤく噴表乃焔ハ大戦
降火のぶ大よあろれ雲乃上人ば城のよ

たゝしよ絶えもまれてもう所の樣。
方へちつと敬とみて花ぞ手も
ひくゝ絶倫人の舞おれば敵乃やく
ぬすようやゆかぬ去もしかし
だらひあやなつこう屋うちやめ入れ
惡心煩惱つや晴て五音樂をう
ちたまへ修乃太拙いうちやめ。

此君乃はいのちぞあれ大樂をうたうよ拙
まゝ番や萬代とだらも学て安樂
よ 拳樂をうよ也もをうよ
きまあぶ乃端とおうめやまてまね
きうまひ乃手のぶ乃やうう
ぬ乃きいうちたまで和て紙を
やもうん我よかも胸のきり。重